

〈巻頭言〉

モンゴル大蔵経

研究・国際交流担当副学長・教授 松川 節 (人文情報学 東洋史学)

モンゴル語で書かれた仏典の起源は13～14世紀のモンゴル帝国・元朝時代に遡るが、現存するモンゴル仏典の大部分は、17世紀後半以降に書写・印刷されたものである。清朝の康熙・雍正・乾隆年間、つまり17世紀半ば～18世紀末のあいだ、モンゴル仏典が北京・内外モンゴル・ブリヤートなどで盛んに書写・印行された。その中でも、康熙帝の勅命によって1720年に北京版モンゴル大蔵経ガンジョル(甘殊爾)【=仏説】部108巻(＋目録巻1巻)が開板され、さらに、乾隆帝の勅命によって1749年にダンジョル(丹殊爾)【=論疏】部224巻(＋目録巻1巻)が開板され、ここにモンゴル語訳一切経の成立を見たことは、モンゴル仏教史における金字塔と言えよう。

周知のように、大谷大学博物館には北京版チベット大蔵経が所蔵されており、1717-20(康熙56-59)年に刊行されたガンジョル部106巻(＋目録巻1巻)、1724(雍正2)年に刊行されたダンジョル部224巻(＋目録巻1巻)から成る。北京版モンゴル大蔵経の編纂・開板は、北京版チベット大蔵経のそれと極めて近い環境下で行われたのであった。

中国第一歴史檔案館の李保文の研究によると、中国第一歴史檔案館所蔵の文書資料「滿洲文朱批奏折」の一通に、康熙帝が勅命によってモンゴル・ガンジョルを開板させた経緯が記されている。それによると、モンゴル・ガンジョルの開板に当たって、頭等侍衛ジャンシェウという満洲人の邸に保存されていたモンゴル・ガンジョルが原本として利用され、1683年に北京で開板されたチベット・ガンジョルとの綿密な校訂がなされたという¹。

このとき利用されたモンゴル・ガンジョル原本のその後の消息は不明だが、それは、17

世紀初頭にトゥメドのアルタン・ハーンの命によって編纂された108巻のガンジョルか、チャハルのリグデン・ハーンの命による113巻のガンジョルのどちらかの系統のものであったにちがいない。

アルタン・ハーンの命による108巻の写本ガンジョルは伝存しない。一方、リグデン・ハーンの命によって1628～29年に完成した「金字写本ガンジョル」は、アルタン・ハーン時代の写本ガンジョルに若干の改訂を加えたものにすぎなかったということが、ドイツのモンゴル学者ハイシヒの研究によって明らかにされている。この「金字写本ガンジョル」113巻のうち、20巻が内モンゴル社会科学院図書館に所蔵されている。1957年に瀋陽の実勝寺から将来されたものである。この20巻は、1902年に内藤湖南が同じ実勝寺で発見し、1906年の調査を経て日本に将来し、東京帝国大学図書館に保管されたものの、1923年の関東大震災によって焼失した「金字蒙古文蔵経」²の名残りである可能性が高い。また、サンクトペテルブルク大学図書館に所蔵される写本ガンジョル113巻も、金字ガンジョルと同じ系統であることがわかっている。

1720年に開板された北京版モンゴル大蔵経ガンジョル部は朱墨印刷で、モンゴル国、中国を始め、世界各地の図書館に所蔵されており、日本では東洋文庫が完全なセットを有している。また、1970年代にインドで白黒影印版が出版され、本学図書館もこれを所蔵している。開板に際してチベット大蔵経ガンジョル部との綿密な校訂がなされたというが、チベット版が106巻であるのに対してモンゴル版は108巻であることに留意する必要がある³。

一方、北京版モンゴル大蔵経ダンジョル部は、モンゴル国に1部、内モンゴルに2部の所蔵が知られていたが、外国の研究者はアクセスすることができなかった。

2007年より、内モンゴル社会科学院・内モンゴル自治区新聞出版局の共編による影印本『蒙古文大蔵経』全400巻の出版が開始され、2014年に完了した。影印本は朱墨印刷を忠実に再現しているが、原本が17センチ×59センチであるのに対して、影印本は40パーセントまで縮小され、横型A4サイズに表裏一葉分が上下に印刷されており、ハンディな装丁になっている。

かくして、北京版モンゴル大蔵経ガンジョル部108巻(＋目録巻1巻)、ダンジョル部224巻(＋目録巻1巻)は学界の共有財産となった。それでは、以上の334巻以外の66巻は何だろうか。

北京版チベット大蔵経ダンジョル部が1724年に刊行される際、雍正帝の勅旨により、ツォンカパ全書(20巻)とチャンキャ全書(7巻)が増補編入された。今般の影印本『蒙古文大蔵経』出版においても、これらのモンゴル語訳を編入しようとしたが、モンゴル国に1部、内モンゴルに2部所蔵されているモンゴル・ダンジョルは、いずれもツォンカパ全書とチャンキャ全書を伴っていなかったため、いわゆる北京街版のツォンカパ全書(20巻)とチャンキャ全書(5巻)を編入してこれに当てたという。

これに関連して、京都大学に北京版モンゴル大蔵経ダンジョル部48巻が所蔵されていることに注目したい。1929年10月12日付け『大阪毎日新聞』によると、「蒙古語のタンジュール約五十套」が京都大学文学部に到着した。その調査が石濱純太郎によって行われた⁴結果、48巻の中に朱墨印刷のツォンカパ全書7巻とチャンキャ全書2巻が含まれていることが判明した。北京版モンゴル大蔵経ダンジョル部の開板に際しても、ツォンカパ全書とチャンキャ全書が増補編入されていたのである。京大本は、目下のところ天下の孤本と言ってよいだろう。

400巻のうち残る41巻は、「伏藏」、すなわ

ちチベットの「埋藏經典」のモンゴル語訳を集めて編入したもので、影印された原本は、北京故宮博物院に所蔵されていたが、文化大革命後期に売りに出され、内モンゴル師範大学が廉価で購入したものであるという。

「伏藏」も含め、この記念すべき出版が契機となり、モンゴル仏典に関する研究はますます盛んになるであろう。



本学図書館に配架された
影印本『蒙古文大蔵経』全400巻



『蒙古文大蔵経』ダンジョル部の一葉。
原本の朱墨刷りが忠実に再現されている。

- 1 李保文「關於康熙版蒙古文《甘珠爾》經的刊刻」『故宮博物院院刊』2002：5, 79-88.
- 2 内藤虎次郎「焼失せる蒙滿文蔵經(1)～(2)」『芸文』15：3, 1-11, + 1 pl., 6, 74-86.
- 3 北京版モンゴル大蔵経ガンジョル部と北京版チベット大蔵経ガンジョル部のコンコードダンスが Andrew Glass によって作成され、WEB 上で公開されている (<http://andrewglass.org/mong.php>).
- 4 石濱純太郎「京都帝國大學所蔵蒙文丹珠爾記」『桑原博士還曆記念東洋史論叢』1931, 469-475, + 1 pls.